

## ハガイ2章1-9章 「先にまさる栄光」

### 1A 比較という過ち 1-3

### 2A 恐れ克服 4-5

### 3A 終末の中の栄光 6-9

## 本文

今朝の聖書本文は、ハガイ書2章 1-9 節です。

1 ダリヨス王の第二年の第七の月の二十一日に、預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。2「シエアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアと、民の残りの者と共に次のように言え。3 あなたがたのうち、以前の栄光に輝くこの宮を見たことのある、生き残った者はだれか。あなたがたは、今、これをどう見ているのか。あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。4 しかし、ゼルバベルよ、今、強くあれ。——主の御告げ。——エホツァダクの子、大祭司ヨシュアよ。強くあれ。この国のすべての民よ。強くあれ。——主の御告げ。——仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。——万軍の主の御告げ。—— 5 あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。恐れるな。6 まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。7 わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の主は仰せられる。8 銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の主の御告げ。—— 9 この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。——万軍の主の御告げ。——」

私たちは聖書通読の学びで、エズラ記を読み始めました。イスラエルの残された民がペルシヤのクロス王の布告によって、エルサレムに帰還し、神殿を再建することになります。私たちはこの前の学びで、礎が据えられたところを読みました。

その箇所をもう一度、読んでみたいと思います。3章 11-13 節です。「11 そして、彼らは【主】を賛美し、感謝しながら、互いに、「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに」と歌い合った。こうして、【主】の宮の礎が据えられたので、民はみな、【主】を賛美して大声で喜び叫んだ。12 しかし、祭司、レビ人、一族のかしらたちのうち、最初の宮を見たことのある多くの老人たちは、彼らの目の前でこの宮の基が据えられたとき、大声をあげて泣いた。一方、ほかの多くの人々は喜びにあふれて声を張り上げた。13 そのため、だれも喜びの叫び声と民の泣き声とを区別することができなかった。民が大声をあげて喜び叫んだので、その声は遠い所まで聞こえた。」彼らは大声で主を賛美しました。けれども、その声の中に喜びではなく、大声をあげて泣いていた

人々もいました。老人たちが泣いていた、とありますが、彼らはかつてソロモンの建てた神殿を見たことのある人々です。ソロモンの神殿と比べると、あまりにも見劣りする規模の小さいものだったので。

ところで、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアの率いるこの神殿建設は、途中で周辺の住民の反対を受けて、しばらくの間、停止していました。エズラ記 4 章にそのことが書かれています。長いこと建設が中断していた時に、二人の預言者が彼らに対して預言しました。ハガイとゼカリヤです。5 章 1-2 節を読みます。「1 さて、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの、ふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に、彼らとともにおられるイスラエルの神の名によって預言した。2 そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツァダクの子ヨシュアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた。」この二人の預言者の励ましによって、彼らは工事を再開することができました。

その励ましの言葉が、ハガイ書とゼカリヤ書です。そして、今朝の本文、ハガイ書 2 章 1-9 節は、その励ましの言葉の一部になります。工事を再開させた彼らが、落胆と恐れとの戦いの中で、いかにこの働きを継続できるようにさせるか、神からの励ましがここに書かれていました。

私たちは、エズラ書において「神の民の建て直し」というテーマで学んでいます。主が与えてくださった恵みから離れてしまった、あるいは主が行われていることが変わったことによって、これまで自分たちがしていたものが失われています。けれども、主がわたしの業に関わりなさい、と鼓舞されます。そこで、私たちが神の働きを改めて始めていくのです。

### 1A 比較という過ち 1-3

もう一度、ハガイ書 2 章 3 節を見てください。「あなたがたのうち、以前の栄光に輝くこの宮を見たことのある、生き残った者はだれか。あなたがたは、今、これをどう見ているのか。あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。」これが、老人たちが神殿の礎が完成した後で嘆いた理由でした。以前の栄光に輝くソロモンの宮と比べて、今、見ている再建している宮が無いに等しいと感じました。それで彼らは落胆していたのです。

私たちに、落胆、落ち込みという問題があります。落胆、落ち込みは、神の民に対する悪魔の最も頻繁に使われる武器の一つです。神は、悪魔の攻撃に対抗できるように、実に数多くの励ましをもって私たちが生きている間、語り続けてくださっています。預言というのは、慰めと励ましと、徳を高めるために与えられているし、聖霊は助け主、すなわち「そばにきて援助する」という意味、パラクレトスというギリシヤ語が使われています。主が再び戻ってこられるまで、私たちは絶え間なく励ましを受けなければ前に進めない存在です。

ところで、教会が聖霊に満たされた人々がいるときは、励ましと勧めでいっぱいになっている状

態になっています。「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。(ヘブル 10:24-25)」

そこでハガイは、彼らの落胆の原因を指摘しています。それは「比較」という原因です。ソロモンの過去の栄華と今を比較したので、落胆したのです。

私たちは、過去と今の自分を比べて、どれだけ落胆していることでしょうか？過去に主の著しい御霊の働きが与えられていて、今はそうでもないから落ち込んでしまいます。以前は、主の愛が身近に感じて、主と共に歩むことがよく分かり、心から主をほめたたえながら日々を過ごしていたのに、今はそうっていない。教会に来ることが楽しくて仕方がなかったのに、あの情熱が今の自分にはない。いったい自分は何をやっているのだろうか？と思っているでしょう。あるいは、人生の岐路に立っている人もいることでしょう。かつての栄光を思い出して、今の自分を比べて、今の自分があまりにも見劣りするとき、落ち込んでしまうのです。ところが、実は今、このようにされているのは、まさしく主なる神ご自身なのです。そして、それは自分を惨めにするためにそうされているのではなく、むしろ神の御業が新たに始動しているに過ぎません。

「比較」というのは、過去と今だけでなく、他者と自分というものもあります。他の教会では、これだけたくさんの方が信仰を持っているのに、私たちのところでは救われる人が少ない。私の友人は、主にこれだけ用いられているのに、自分は用いられていない。教会の規模も比較の対象です。自分の教会と、他の教会がこれだけ来ている人数が違う。あるいは、自分の取り組んでいる仕事について、圧倒的に他の人より劣っていると感じている時、落ち込まないでしょうか？他者との比較は、賢くない、愚かであることを聖書は教えています。「彼らが自分たちの間で自分を量ったり、比較したりしているのは、知恵のないことなのです。(2コリント 10:12)」

そして、比較は、神に与えられた大きな幻と、今現在の自分との比較というものもあります。神の与えられている幻は、世界宣教だ。けれども自分のしていることは、たった一人の人さえキリストに導けていない、という挫折感があります。キリストに似た者になるという、神の御心があります。けれども、自分は過去に犯した過ちを再び犯してしまっただけでなく、全然、霊的に前進していないではないか。神が語られていることはこんなにも大きいのに、私がしていることはいったい何なのだ、という圧倒された思いと失望感です。この失望感はある意味で健全です。もし、こうした挫折を通過していない人は、おそらく神の幻も受け取っていないことでしょう。「そんなことないですよ、私はいまの自分で満足しています。」という人は、たぶん、神ではなく自分の立てた計画にしたがって動いています。神ではなく、自分を喜ばせて生きています。自分に合わせることによって、神の幻を矮小化しています。ですから、神に圧倒されて今、抱いている葛藤、神に対して自分が無き者に等しいではないか、という葛藤は、主から来たものです。

## 2A 恐れ克服 4-5

こうした比較の問題に対して、主が励ましを与えられます。「4 しかし、ゼルバベルよ、今、強くあれ。——主の御告げ。——エホツァダクの子、大祭司ヨシュアよ。強くあれ。この国のすべての民よ。強くあれ。——主の御告げ。——仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。——万軍の主の御告げ。—— 5 あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。恐れるな。」

「強くあれ」という励ましです。主は、新しく事を行われる時、人を用いて事を行われる時、その人に「強くあれ」という言葉をかけられました。モーセの後継者であるヨシュアは、モーセが死んで、自分ひとりでイスラエルを率い、約束の地で先住の民と戦わなければいけません。それで主が、「ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。(ヨシュア 1:7)」と仰いました。ダビデの息子ソロモンに対しても同じです。これから一人で神殿建設の事業に携わらなければいけないとき、「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。(1列王 2:2)」とダビデは言いました。そして使徒パウロは、コリントにある教会の人たちに、「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。(1コリント 16:13)」と言いました。私たちの心は繊細です、様々なストレスで弱くなります。だから、「強くありなさい」という励ましが必要です。

どうすれば、強くなるのでしょうか？「あなたは大丈夫よ。」という積極的思考で強くなるのでしょうか？いいえ、あなたはいつまで経っても、意気地なしなのです。自分ではできる、自分が大丈夫という積極的思考ではありません。パウロが、エペソ人への手紙でこう言いました。「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。(3:16)」父なる神の栄光の豊かさに従って、内なる人を強くしてくださいます。また、御霊によって強くしてくださいます。

パウロは、「神の栄光を望んで、大いに喜んでいます。(ローマ 5:2)」と言いました。神の栄光を望みます。今回の旅行(アメリカ旅行)の帰りに、ある人から、「宣教会議では、何を語られましたか？」と聞かれました。私はなかなか一言で答えられませんでした。それぞれの説教者が御言葉での励ましをしましたが、時差ボケで睡魔との闘いがあり、なかなか集中できませんでした。けれども、一つはっきり残っているものがあります。神の栄光を大いに喜んだことです。礼拝賛美のとき、自分ではなく神がほめたたえられます。神が行われたこと、神が今、行われていることを歌います。自分がこの一年、何をしてきたのかという反省以上に、神がこの一年、何をしてくださって、何をこれからしてくださるのかを、明確に見ることができます。

そして、「仕事にとりかかれ」と促しています。内なる人が強められたら、後は行うのみです。「分かっているけれども・・・」という人が多いと思います。しかし主は、信仰によって一步を踏み出さない限り、ご自身の約束を現実のものとしてお見せになりません。イスラエルの民のところに、エ

ジプトが追い迫っているとき、モーセは、「しっかり立って、きょう、あなたがたのために行われる主の救いを見なさい。」と叫びました。そして、モーセは、「救ってください！」と主に向かって叫んでいたのだと思います。なぜなら主が彼に、「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。」とされているからです。そうではなく、「イスラエル人に前進するように言え。」とされます！私たちの理解では、海の中に入って、溺れ死になさいと言っているに等しいです。けれども、前進することによって初めて、紅海が分かれて、海の中を通るという主のご臨在と奇跡を体験できるのです。

そして、「わたしがあなたがたとともにいるからだ。」と励まされます。これは、神のお仕事をする人に必ず与えられる約束です。イエス様が、すべての国民をわたしの弟子にきなさいという命令を与えられた後で、世の終わりまであなた方と共にいる、と約束してくださりました。自分がこれまで体験したことのない神のご臨在を、神の呼びかけ、召しに応えることによって体験することができます。私は、この前、タイへ宣教旅行に行ったチームに対して、このように言って励ましました。「自分が行くことによって、イエス様をもっとより良く知ることになります。」自分が何かしてあげるのではなく、自分自身がイエス様を体験できるのです。

そして、5 節「あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。」と主は言われています。エジプトから出てきた時の約束、すなわち「全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。(出エジプト 19:6)」という約束です。その約束をもって、神がご自分の霊をもって働いてくださいます。神がご自分の霊をもって働かれることについては、ゼカリヤ書 4 章に詳しく書かれています。これは次回、学んでみたいと思います。

そして「恐れるな。」と励ましておられます。彼らは、周囲の住民からの強力な神殿建設阻止運動を受けていました。外部からの圧力から来る恐れがありました。皆さんも、イエス様の命令に従おうとすると、周りの人たちの目が気になると思います。主は「恐れるな」と語られます。そして神殿建設は、途方もなくあまりにも大きな事業なので、圧倒されて恐れを抱いていることもあると思います。主に与えられた働きが、あまりにも重大であると感じ、自分には到底担えないという重圧感があるかもしれません。「恐れるな」と語られます。それから、彼らはバビロンに捕え移されたという、深い傷を負っています。つまり、過去に大きな失敗をしています。過去の罪、あるいは失敗は、私たちの霊的前進を妨げる要因の大きな一つになります。しかし、やはり主は「恐れるな」と言われます。

### **3A 終末の中の栄光 6-9**

そして、6-8 節を読みます。6 まことに、万軍の主はこう仰せられる。しばらくして、もう一度、わたしは天と地と、海と陸とを揺り動かす。7 わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の主は仰せられる。8 銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の主の御告げ。——

もう一度、天と地を、また海と陸を揺り動かすとは何か？これは、私たちが年末礼拝で学びました、世の終わりの時に、主は今ある天と地を過ぎ去らせ、新しい秩序を造られることです。この箇所を引用して、ヘブル書の著者はこう述べています。「あのときは、その声が地を揺り動かしましたが、このたびは約束をもって、こう言われます。「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。(12:26-28)」決して揺り動かされない御国が到来するので、今の天と地が揺り動かされます。そして著者は、だからこそ、恐れと慎みをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができる、と述べています。

その天変地異を起こされるにあたって、「わたしは、すべての国々を揺り動かす。」ということも主は行われます。今、異常気象、多くの天災、地震が起こっていると同時に、世界情勢、国内情勢も不穏な動きがたくさん出ています。人々はますます、内向的、閉鎖的になり、自分の身の周りのことが普段通りであれば、外で起こっていることは関係ないとして、「頭隠して、尻隠さず」の状態になっています。あるいは、表に出ていって、こうしたおかしな動きの只中に入って、ますます自分を見失っている人々もいます。世の中、おかしくなっています。

しかし、だからこそ、キリスト者が生き生きとしていることができるのです。恐れと慎みをもって、神に喜ばれる奉仕をすることができます。今、主が命じられていることが何かをわきまえて、そのことに従事するのです。悪魔は何とかして、私たちを主ご自身から目をそらすべく、躍起になっています。そして主が行われていることなのに、自分たちで把握する、掌握しようと動き出すよう、虎視眈々と待っています。「そんな誘いに乗ってたまるものか！」と悪魔に言いたいです。

しかし、繰り返しますが、私たちはこのような不穏な世の中であるからこそ、これまで以上に主にあって輝くことができるのです。世の流れに抗い、圧倒的な勝利をもって輝くことができます。神殿再建の工事をしているユダヤ人に対して、「すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。」と主は言われました。主イエス・キリストが地上に再臨されると、この方はエルサレムに神殿をお建てになります。そしてその中に、ご自分の王座を設けられ、そこに着座され、王として、また祭司として世界を君臨されます。その時に、世界中から財宝が持ってこられます。「目を上げて、あたりを見よ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。あなたの息子たちは遠くから来、娘たちはわきに抱かれて来る。そのとき、あなたはこれを見て、晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。海の富はあなたのところに移され、国々の財宝はあなたのもものとなるからだ。(イザヤ 60:4-5)」そして、後の神殿は栄光に輝くのです。

そして 9 節を見てください。9 この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。

先のものにまさる栄光、すなわちソロモン時代の神殿にまさる栄光を、神はゼルバベルとヨシュア、そして残りの民に対して与えてくださいます。無きに等しいと嘆いていた彼らに対して、その無きに等しいものが、ソロモンの時の栄光にまさるものになるのです。

皆さんは、何とこれまで自分を比較してきたでしょうか？その比べている大きなものを見て、自分の目の前におられる主ご自身、主のご臨在、主の御霊、主の約束をないがしろにしていないでしょうか？目の前にある、主が与えておられる霊的な泉をないがしろにして、外側にある、自分のものではないものを羨ましいと思っている、貪ってはいないでしょうか？また自分のものではないものを得ようと、競走して勝ち取ろうとしてはいないでしょうか？主から与えられている恵みに戻りましょう。主はその小さいと私たちが軽んじるところにおいて、実は、先のものにまさる栄光をお与えになろうとしておられます。神は、キリスト・イエスの日までに、自分のうちにで始められた良い業を必ず完成してくださるのです。